



社会に伝える

一般の市民にプロジェクトについて紹介する活動を各機関の担当者たちが実践しています。まず、JAL の江藤仁樹さんから話を聞きました。

私は、社内において、この大気観測に関する調整業務の他に、現役機長と共に学校等へ出向いて環境のお話をする出前講座「そらいく」も担当しています。

「そらいく」の中では、パイロットがフライトで感じている地球環境の変化(近年、北極の氷が夏場に以前よりも融けてしまう様子の写真など)とともに、この大気観測プロジェクトも JAL が行なう環境に対する社会貢献活動のひとつとして、多くの子どもたち、皆さまへご紹介しています。

そこで感じる参加者の反応の多くは、『地球がこのような深刻な状態になっていることは、知らなかった!』、『JAL がこのような活動を行なっていることは知らなかった!』、『飛行機は環境にやさしくない乗り物だと思っていたけど、見方が変わった!』というものです。

航空会社に勤務する自分にとって、プロジェクトの成果や航空機が見直されるような、このような反応は全て嬉しい内容で、新たなお客様にこの大気観測をご紹介できることは自分の仕事のやりがいにも通じています。

しかし、見方を変えてみると、このように誰からも好意的に受け止められるこのプロジェクトの一般の方々への認知度は、まだまだ低いということに気がきます。また、その認知度を高める体制もまだまだ十分とは言えません。人類にとって、さらには地球にとって非常に必要な意味を持つ、このコントロールプロジェクトをより多くの方々に知っていただくべく、これからもたくさんの子供たちの中で、講座を続け、このプロジェクトの持つ意味を話して行きたいと思っています。

日本航空 江藤 仁樹

CONTRAIL のロゴマークを作ろうという意見が以前か

らあったことを受け、JAL が中心となって 2011 年から本格的な検討が始まりました。そして、2012 年に JAL 宣伝部(復刻版の「鶴丸」ロゴマークを手がけたチーム)がデザイン案を作り、関係者による調整のうえ決定しました。

観測に使用されている機体のひとつにこのロゴマークを塗装し、2012 年 7 月にはそのお披露目を兼ねた報道発表をしました。多くの取材陣が羽田空港を訪れ、実際に報道につながりました。



(写真:日航財団)

JAL では、これ以外にも機内誌やウェブサイト上で、地球環境に関する「空のエコ プロジェクト」の広報に取り組んでおり、CONTRAIL もそのなかの主な内容のひとつとして積極的に紹介しています。機内ビデオでも、研究者に登場してもらって CONTRAIL の紹介をしたこともあります。

「空のエコ プロジェクト」には機長など JAL 社員が参加しており、毎年 1 回、研究者を講師として招いて社内で報告会





CONTRAIL をドキュメントする(DoCONTRAIL)



を開催しています。元々の関心が高いメンバーなので、講演を聴く眼差しも真剣そのもの。質疑も活発におこなわれます。

次に、ジャムコの取り組みの例をご紹介します。東京整備工場を訪れる人たちのための見学コースのなかに、CONTRAIL を紹介するコーナーが設けられています。ジャムコの近藤直人さんが経緯を教えてくださいました。

研究者も、学会など同じ業界の人たちだけでなく、一般の人たちに伝える努力を惜しんでいません。国立環境研究所でも、施設の一般公開イベントなどの機会には、子供から大人まで色々な人たちに CONTRAIL について知ってもらおう努めています。



2009 年秋には、サイエンスアゴラというイベントに国立環境研究所からの出展という形で CONTRAIL が登場しました。サイエンスアゴラは、科学を市民に分かりやすく紹介するため、東京のお台場にある日本科学未来館やその周辺で毎年開催される国を上げての行事です(ちなみにアゴラとは広場の意味だそうです)。

これまでに国立環境研究所が機関として出展したのは唯一この 2009 年で、それを実現したのは熱い心を持つ一人の男でした。当時、国立環境研究所で情報発信の仕事をしていた杉盛啓明さんです。その杉盛さんから回顧録をいただきました。

環境試験に使用した供試体があるので、工場を訪問されたお客様に見て頂いて、大気観測のことを知ってもらおうということで展示コーナーを始めました。



「飛行機でこんなことをやっているなんて知らなかった、すごいことをやっていますね！」というのが見て頂いた一般のお客様から出てくる大方のご感想です。



論文、報告書、雑誌など展示物も少しずつ増えているのですが、文書の類は時間の制約もあるせいか、なかなか手に取って見て頂けません。



何か他にいい展示物がないかなと思っていたところ、別の建物の片隅で、捨てられそうになっていた、振動試験用の固定金具(「治具」と呼ばれるもの)を見つけ、展示コーナーに置きました。

もしかすると、これらの固定金具はいずれ修理されて、もう一度本来の姿で活躍するかもしれませんが、それまでは展示物として広報活動に貢献してもらいたいと考えています。

ジャムコ 近藤 直人

●アゴラに出展しようと構想した経緯

当時、研究所での日々の業務として、環境情報を提供するウェブサイトを運営していましたが、情報の受け手との距離を感じ、もっと直接的かつ双方向に、環境問題に関心のある人々とコミュニケーションできる場をつくってみたいと思っていました。

そして、そのような場として「サイエンスカフェ」に興味を持ち、北海道大学が開講しているサイエンスコミュニケーションのカリキュラムで学んでいました。

サイエンスコミュニケーションとは、環境問題をはじめ、科学だけでは解決できない複雑な問題について、科学者と社会が積極的に対話することで社会的な合意を目指すものです。

こうした学びを進める中で、業務の発展形としてのサイエンスカフェを、国内で最大規模のサイエンスコミュニケーションのイベントである「サイエンスアゴラ」で実践してみようと思い、職場内で企画書を提出しました。



●CONTRAIL をテーマとして選定

私の企画書に関し、職場での議論により一時は出展を断念する方向に傾きかけました。しかし、管理職のなかで広報に詳しい人がバックアップして下さることになり、最終的には出展申込をすることになりました。

この人のこれまでのご経験から、おすすめの研究者として CONTRAIL のリーダーである町田さんのお名前が挙がり、早速相談にうかがったところ、快く引き受けていただきました。

●事前の検討や準備

出展申込にあたり、企画のタイトルは「なるほどエコトーク！ 地球を感じる もうひとつの空の旅」としました。あえて CO₂ 観測や飛行機といった言葉を使わなかったのは、飛行機で旅をする人にも身近に感じてもらいたいと思ったからです。

申し込み後、しばらくして採択の連絡があり、本格的に準備を開始。同僚にも声をかけたところ、スタッフとして協力してくれる人が何人もいて、とても心強く感じました。

当日の進め方について具体的な計画を立て、所内の会議室でリハーサルを行うなど、準備を進めていく中で、いくつかのアイデアが盛り込まれていきました。以下は、その主なものです。

1)クイズ

町田さんからのお話の中で、時折クイズを出題。参加者には4つのテーブルに分かれてもらい、テーブルごとにクイズの答えを相談・発表してもらうことで、和やかな雰囲気の中で、楽しく対話ができるようにする。

2)地球儀ボール

数十センチの地球儀型ビーチボールをテーブルに置き、遊び心を持って地球を感じてもらう。例えば、北半球と南半球とで陸地（植生）と海洋の割合がちがうことを実際にボールを回転しながら見てもらい、それが CO₂ 濃度の季節変化のちがいとなっていることを理解してもらう。

3)ホンモノに触れる

町田さんのお話を前半・後半に分け、その合間の休憩時間に、実際に JAL 機に載ったのと同じ CO₂ 濃度連続測定装置（CME）を展示。参加者の方々にもさわってもらいながら、観測の仕方を説明することで、より具体的にイメージを持ってもらう。

なお、事前の広報としては、研究所のホームページやいくつかの環境情報サイトに、開催案内と参加者募集を掲載してもらうとともに、興味を持ってもらえそうな友人知人にメールで案内を送りました。さらにチラシをつくり、都内での研究所の出前講座で紹介したり、会場となる日本科学未来館に置かせてもらったりしました。

●本番

カフェ当日は、23 名の方が参加してくれました。町田さんからは、地球の温室効果のしくみや、大気中の CO₂ 濃度の時間変化、さらには場所や高度による濃度の違いなどについて



解説がありました。例えば、南極の氷に閉じ込められた空気から過去の CO₂ 濃度がわかること、上空の CO₂ 濃度を観測するために飛行機や気球を使うこと、こうした観測のために南極やシベリアに出かけたことなど、これまでのご経験に基づくお話があり、さらに最近の新しい観測として CONTRAIL が紹介されました。

私は司会進行を担当し、時々噛みながらも、町田さんの明快なトークと、スタッフ



の皆さんのチームワークのおかげで、無事に終了することができました。



参加された方々のアンケートを読むと、内容はおおむね好評で、「町田さんのお話が面白かった」「親子で楽しめた」といったコメントも寄せられました。また、今後研究所のこういうイベントに「ぜひ参加したい」という人も多くいました。もっとも、意見交換や質問の時間がもっと欲しかったという貴重な意見もありました。

全体的には、当初目指していた、「環境問題に関心のある人々と国立環境研が、直接的かつ双方向にコミュニケーションできる場をつくる」ことができたのではないかと考えています。

杉盛 啓明

実は杉盛さんと筆者は研究所で部署は違いますが同僚でした。そして、「社会コミュニケーションに関する所内勉強会」という研究所のなかの自主的な学び合いの場を運営する中心メンバーとして「同志」の間柄です。杉盛さんは毎回の勉強会を企画する際に、単純なセミナー形式でなく、少しでも「遊びの要素」を入れようと提案しました。そして、その柔軟な発想がいつも素晴らしい結果につながるので、幹事メンバーたちから尊敬を集めていました。

2009年11月のサイエンスアゴラはこの勉強会が始まる前のことですが、彼の知恵と才能が最大限に活かされていることが分かります。サイエンスカフェのひとつのお手本を示してくれました。支援スタッフのひとりが質の高い映像でこのイベントを記録してくれていました。残念ながら一般向けに公開はされていませんが、上記回顧録とともに、CONTRAILが今後、一般向けのイベントを企画する際にも大いに参考になることでしょう。

杉盛さんはCONTRAILに対して次のようにエールを送ります。「たくさんの線が重なって描かれることで、立体が浮かび上がって見える絵のように、これからもCONTRAILプロジェクトで航路上のデータがこつこつと積み重ねられていくことで、地球の大気における温室効果ガスの全体的な分布とそのダイナミックな変化が、よりはっきりと見えてくることを期待しています。」